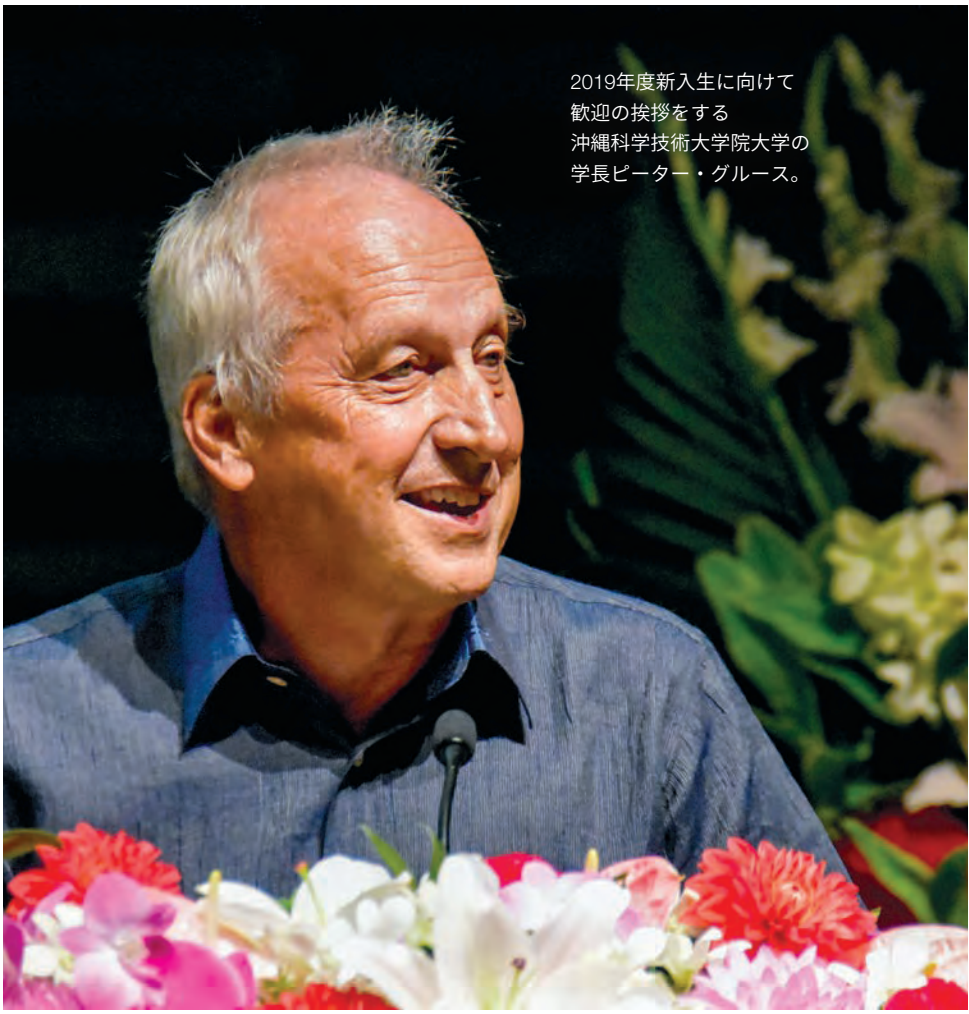
架け橋の大学

「本学には世界最高峰の学術研究機関になる潜在能力があります。大学は、その第一歩を踏み出したところです。」（学長ピーター・グルース）



2019年度新入生に向けて歓迎の挨拶をする沖縄科学技術大学院大学の学長ピーター・グルース。

本学は架け橋となる使命を持った大学です。素晴らしいキャンパス施設の間を流れる亜熱帯雨林の谷には実際に橋が架かっていますが、本学は沖縄と本土との科学的、経済的、文化的な連帯を強化する架け橋となっています。本学教員と世界の研究コミュニティの一流科学者とのワクワクするような協働・共同研究を促す知的架け橋の役割も果たしています。

本学の設立に関わったノーベル賞受賞者のシドニー・ブレナー博士、ジェローム・I・フリードマン博士、トーステン・ヴィーゼル博士、スティーブン・チュー博士、そして政治家の尾身幸次氏は、「世界最高水準（best-in-the-world）」の研究を行う研究機関の創設という構想を掲げました。それからわずか8年で、私たちはその構想の実現に向けて大きく前進しました。最近発表された世界の研究機関を対象とするNature Index「正規化ランキング」は、自然科学論文の総発表数に対する質の高い科学論文の比率を指標とするものですが、このランキングで国内第1位、世界第9位に位置付けられたのです。「新興の研究機関」が、わずかな期間でどうやってこの成果を上げたのでしょうか。

一流への架け橋

どんな組織でも、2通りの考え方をする人がいます。星を手に入れようと夢見る人と、しっかりと地に足を付けることを重視する人です。本学の科学者には、星に手を伸ばして不可能と思われることにチャレンジする精神を期待します。科学者が自由に最先端の知を探究できるように、私たちは資金、研究環境、事務面で周到な支援を行いたいと考えています。本学では、各種規制の枠内で可能な限り効率的な業務運営を行うよう努めています。

国内外の研究機関には、実績のある研究者ですら管理業務や助成金の申請に忙殺されて、十分な研究時間を確保できていないところがたくさんあります。本学では、助成金申請やその他の管理業務の負担を減らすために大学側ができることを全て行い、教員が研究に集中できるようにしています。

卓越性への架け橋

本学は、私の前任機関であるドイツ・マックス・プランク学術振興協会が過去100年間に亘り採用してきたやり方を踏襲しています。最高の人材だけを採用するというものです。本学は、プロジェクトではなく頭脳に資金を提供します。本学が世界の大多数の研究機関と明らかに異なる点は、安定的な資金を確保している点です。それにより、リスクは高いがポテンシャルも高い、優れて創造的な研究に途を開いているのです。こうした安定的資金は、本学が世界的に傑出した研究機関の地位を維持するために不可欠なものです。こうした短期間の偉業を可能にするハイトラスト・ファンディングが無ければ、本学が頂点を極めて成功を築き上げることはできませんでした。一方、ハイトラスト・ファンディングには、適切な説明責任の遂行が伴わなければなりません。本学では、説明責任は確実に遂行されています。国際的に著名な専門家のチームが、厳格な世界的基準に照らして、各教員の成果を5年ごとに審査しているのです。この審査の後に、次の5年間の資金供与が決定されます。

世界への架け橋

沖縄は145万人が住む島です。美しい緑の森と手付かずの青い海があり、にぎやかな県都までは本学から車で約1時間です。居住者でも旅行者でも、すぐに魅力を感じとることができる場所です。短時間のフライトで本土にも多くのアジアの大都市にも行ける一方、都市からは比較的離れていることから、研究に集中しやすい場所になっています。

本学では研究者が極めて自律的に研究できる環境が提供されるため、本土を含め世界中から科学者がやって来ます。さらに、有望な若手研究者が定着して成長できるように他の研究機関ではまねできないようなテニュアトラック制度が整備されています。これらの若手研究者の中には日本人が多く在籍しています。

本学が有する豊かな国際性は、国境を越えた協力と理解を促進します。今年は、10名の教員新規募集枠に対して1,544名の応募がありました。大学院生に関しても状況は同様で、入学希望者1,540名の中から、54名の優秀な学生が選考されました。本学が魅力的な研究の場となっているのは明らかです。

この点で、私は本学が模範たり得ることを確信しています。本学は、研究の卓越性を示す標準モデルとなり、日本の研究能力を高めて、より広い研究コミュニティに対して重要な見識を提供することができるのです。

沖縄の人々への架け橋

本学は、近隣の人々との交流の強化に努めています。地域コミュニティのために、キャンパスの内外でさまざまな活動を行っています。数あるプログラムの中で私が気に入っているのは、毎年恒例の「オープンハウス（一般公開）」です。これは、ほとんどの研究室を開放して、子供たちや家族連れが研究に直接触れる機会を提供するものです。昨年は約5,000人が参加しました。

本学が恩納村に設置されたのは大変ありがたいことであり、最先端の研究機関が地域住民の方々のためにできる最善を尽くそうと日々努めています。すでに200名の沖縄出身者を雇用しており、この数を更に増やしていく予定です。1960 ～ 70年代のヨーロッパでは、研究機関や研究そのものの発展に多額の資金が投じられました。50 ～ 60年が経った現在、そうした研究機関は、新たな街、事業、チャンスを生む核となりました。本学はそうした成功例を再現したいと考えています。私はOISTを、恩納村、そして沖縄を代表し牽引するような、エネルギーにあふれる場にしたいと思います。本学は、居住施設の整備のみならず、「国際バカロレア」認定校、スタートアップ企業、そして世界的に著名な技術者が集う研究センターの設立も支援したいと考えています。現キャンパスの北において、本学、恩納村、その他の場所から人々が集い、居住して働くことができる「OISTイノベーションパーク」を開発することができるのではないかと考えています。ワクワクするような発明を展示して新事業の立ち上げを促し、持続可能な環境モデルタウンを創り、多くの人々が日本のこの特別な街を一度見てみたいと思うようになるような将来を思い描いています。本学は恩納村と手を携えて知的拠点及び環境に優しいインフラを整備し、未来志向でイノベーション主導のコミュニティと経済発展のためのエンジンとなる拠点を創造し、ひいては、ハイテクに支えられる沖縄を構築します。

本学の発展によって生まれる仕事は専門性の高い高収益のものであ

り、地元の人々のための雇用機会が絶え間なく創出されるでしょう。本学のインキュベーター施設は、学内の研究から企業をスピンオフさせることを目指しています。本学は、概念実証や知的財産の実用化検証を進めることに精通しています。実用段階へ移行するには、ベンチャーキャピタルが必要です。日本で利用可能なベンチャーキャピタルは米国のわずか3%ですが、日本は世界第3位の経済大国です。良いアイデアを実用化するため、本学は更に努力しなければなりません。

最善への架け橋

2019年6月、本学は、世界最先端の4大学院研究機関と共同で、BRIDGE（Basic Research Institutions Delivering Graduate Education；大学院教育を提供する基礎研究機関）ネットワークを創設しました。連携先は、ロックフェラー大学（米国）、フランシス・クリック研究所（英国）、ワイツマン科学研究所（イスラエル）、そしてオーストリア科学技術研究所（IST オーストリア）です。BRIDGE ネットワークの目的は、協力と交流を通じて科学研究・教育の卓越性を強化することです。BRIDGE ネットワークのメンバーはいずれも大きな成果を上げている世界屈指の科学研究機関で、国際的な環境の中で人材募集と経営を行い、研究機関、政治、分野の枠を越えた協力を促進しています。私は、本学がそのような素晴らしい機関の仲間に迎え入れられたことを誇りに思っています。

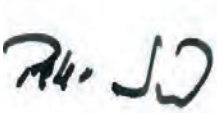
橋を架ける

本学は短期間で大きな成果を上げてきましたが、創設者たちが描いた夢を実現するためには、更に成長しなければなりません。組織の成長が質を損なうものであってはいけません。一方で、世界的なインパクトをもたらすには最低300名の教授が必要であるというエビデンスがあります。カリフォルニア工科大学（米国）は小規模な私立大学ですが、個々の主任研究員に着目しても、研究の質の面で極めて優れています。同大学は注目すべきモデルです。さらに、本学が行った統計的分析では、主任研究員の人数が一定以上になると、生産性が飛躍的に変化することが明らかになりました。

三つの目標

本学は素晴らしいシンフォニーを奏でていますが、まだ完成形ではありません。本学は世界最高水準になるという使命の下に創設されました。スタートから極めて順調に来ていますが、まだまだ成すべきことがあります。沖縄で世界最先端の研究・教育・技術開発を行い、沖縄・日本そして世界に貢献するという三つの目標の実現に向けて明るい未来が開けています。本学がわずか8年で研究界の一流機関の間に位置付けられるようになったことは、本学の経営理念が的確であることを証明しています。

今後は、研究の卓越性を維持しながら、必要な成長を成し遂げていかなければなりません。支援を的確に得ることができれば、構想の実現は可能です。



沖縄科学技術大学院大学学長
ピーター・グルース